農業ガイド1054号　コレ、究めてます　帯畜大教員紹介２　2016年４月23日
山内宏昭教授　十勝産・道産小麦パンを研究

〈プロフィル〉
1957年、愛知県生まれ。82年名古屋大大学院農学研究科食品工業化学専攻修士課程修了。同年～95年、民間企業の研究員。95～2012年農林水産省に入省し北海道農業試験場（現・農研機構北海道農業研究センター）。12年から帯広畜産大教授。食品工学専門。

「ゆめちから」から人材育成へ

小麦の製パン特性の解析、十勝産、道産小麦で作るパンの研究をしている。「農産加工の専門家として一大畑作地帯に貢献したい」と意気込んでいる。

民間化学会社の食品部門で10年以上、道産小麦のパン製造が増えるきっかけになった超強力小麦「ゆめちから」を開発した農研機構北海道農業研究センターで15年以上勤務し同センター芽室研究拠点にも在籍し、官民で食品工学に携わった経験がある。帯畜大は実学的研究にも力を入れており2012年に転籍し大学教員となった。

論文数よりも特許件数の方が多い教員は「異色」と自己評価するが、「民間との共同研究を商品としてアウトプットすることで、学生も社会貢献を実感しながら実力が付く」と話す。

「ゆめちから」を使ったパン製造をする敷島製パン（名古屋市）との共同研究も行った。帯畜大の「とかち夢パン工房」をフル活用。ジュール加熱湯種パンの研究や、「ゆめちから」と中力小麦「きたほなみ」のブレンド粉の中華麺の特性解析も進めている。

食のグローバル化が進む中、「北海道産は加工度を上げて国内外に出していかなければ」という思いを持つ。教員として「未来のある学生に実力を付けて将来を担う人材として育成したい」と話す。

東京圏ＮＯＷ　ビジネス　十勝へのメッセージ　2016年５月10日
ヤンマーアグリジャパン　増田長盛社長（57）
十勝は先進的、「日本の手本といえる存在」

創業１世紀を超え、農機や船舶、建設機械などを幅広く手掛けるヤンマー（本社大阪）。農業分野の販売会社であるヤンマーアグリジャパン（同）は、管内で無人走行トラクターの実証実験を展開中で、国内外に点在する農機の故障や盗難に、一元的に対応するリモートサポートセンターを運営するなど、最先端の技術で営農を支援する。増田長盛社長（57）に企業戦略や十勝農業の可能性などを聞いた。

最新鋭の農機　体感して

最新鋭の農業機械を体験できる、江別市内のアグリソリューションセンター北海道

－ＩＣＴ（情報通信技術）を活用した技術革新を進めている。

無人走行するロボットトラクターを使った実証実験を音更町など全国４カ所で実施している。音更では生産者と佐藤禎稔帯広畜産大学教授に協力いただき、稼働データを蓄積し、成果と課題を確認している。４割の作業省力化が実証されており、実用化を急ぎたい。

ドローンを活用したリモートセンシングの試験も順調だ。上空からほ場を撮影して生育状況を把握し、ピンポイントで適正施肥や適期収穫などに対応する。どちらも省力化やコスト削減につながり、農業全体が抱える問題である担い手不足や高齢化に対応できる。経験に頼るところが大きかった農業だが、栽培、作業履歴の数値・データ化で、就農者や若い農業者を支援できれば。

24時間遠隔監視

－自社の強みをどう分析し、営業戦略に生かしているか。

農機以外にも船舶、建機、発電機などを自社開発、製造し、事業間で連携、ソリューション（問題解決）を提案している。空調設備の一元管理からスタートした農業機械の遠隔監視システム「スマートアシスト」は、本社の「リモートサポートセンター」で24時間稼働状況を把